

和牛肥育にも利用

山形県真室川町のJA真室川は、もみ米サイレージを配合した混合飼料で、和牛肥育を本格的に始める。町内産の原料を多く使い地域内の飼料自給率を高め、飼料費を抑える。管内の農家が、今年度から肥育を本格化させる計画で、町内産飼料を多給したブランド牛肉の創設を狙う。

もみ米サイレージ配合飼料

ブランド創設狙う



繁殖牛舎に肥育牛を入れ、もみ米サイレージを配合した飼料で肥育試験をする遠田晃広さん(山形県真室川町で)

山形・JA真室川

JAは、飼料用米を生産

する耕種農家と町内産飼料を使う畜産農家の連携を進めるため、全国的にも珍しい

町内産使いコスト削減

い完熟期に収穫したもみ米で調製したサイレージを生産・販売する。サイレージは、米をボン菓子のように膨軟化処理をして水を加えて発酵させる。これまでは繁殖牛や子牛の育成で利用していた。

模の肥育農場を造る。既に繁殖牛舎の一部に去勢牛と雌牛を入れ、もみ米サイレージ入り飼料を与え、試験的に肥育する。

配合割合は、JAで検討してきた。もみ米サイレージは可消化養分総量(TDN)は高いが、粗タンパク(N)は高い。CPを補うため、国産の大豆かすを混ぜる。肥育ステージに応じて配合割合は変えるが、全期間をまとめると、雌牛肥育で、もみ米サイレージが重量比で55%、ふすま23%、大豆かす13%、ビールかす8%、ヘイキューブ1%、さらにミネラルなどが入るといふ。

120頭規模の農場

もみ米サイレージで和牛肥育に取り組むのは、母牛70頭の繁殖経営をする遠田晃一さんの(61)息子の晃広さん(28)。「繁殖をやって、次のステージとして肥育をやってみたかった」(晃広さん)と、和牛肥育で別の経営体を作って120頭規模でいく。

TDNの町内自給率は、50%以上。慣行の飼育に比べ、30%以上のコスト削減になるとJAは試算。町と連携してブランド牛として